

伊那の井月 ^{せいげつ}そして山頭火

横松和平太

信州・大鹿村

この春は信州は伊那地方の大鹿村に続けて足を踏み入れた。四月には桜を巡って高遠から秋葉街道を北から南へ、美和湖沿に市野瀬を経て分杭峠を越えて入った。日本海側の糸魚川から太平洋岸まで歩いて横断するいわゆる“塩の道”の街道歩きの途次であった。

翌五月には大池高原で尾根歩きを楽しんだ。大鹿村は南アルプスと中央アルプスの峡間にあり、前衛峰である尾根からはその大展望が素晴らしい。その日は快晴だった。東側には仙丈・北・間ノ・農鳥・塩見が青空をバックに白銀の峰々を間近に連ね。西側にはやや遠く中央アルプスの白い屏風が聳え、遠く乗鞍・北アルプス、南には恵那山まで望むことができた。眼下には高遠から秋葉街道が中央構造線という断層地帯の谷間を縫っているのが見える。大鹿村から更に南へ地蔵峠を越えて和田郷まで、よくも歩き通したものだ感慨深いものがあった。大鹿村は昨年、映画『大鹿村騒動記』で一躍脚光を浴びた。個性派俳優・原田芳雄の最後の主演となった作品だ。劇中で登場した大鹿歌舞伎も大いに注目されることとなり観光客が押し寄せた、でも今年はまだそんなでもないとか。映画のロケで使われた「ディアイーター」という食堂の前は小公園として整備されるというのに。

日本アルプスの名をひろめ上高地にあるレリーフで有名なW・ウェストンの記念碑が大鹿村にもできるとの噂も小耳にはさんだ。新たな話題となりそうだが、W・ウェストンと大鹿村にどんな所縁があるのか。『日本アルプス登山と探検』を読んでみた。そこには大鹿村が登場していた。最初の来日時1892(明治25)年の夏に、高遠から市野瀬峠(今の分杭峠か)を越えて市場(鹿塩)、大河原から小渋川を遡行し、赤石山(赤石岳)に登頂していた。今を遡ることなんと120年前のことだ。単なる旅行記ではなく、民俗に関わる記述があるのが面白い。養蚕が盛んだったのか長谷村の市野瀬では“蠅が格別に繁盛し雲のように集まって来た”と往生している。分杭峠から鹿塩に下る途中に“女高”^{おなたか}という珍しい地名があるが、この地名の由来についても彼は調べ報告している。

そのW・ウェストン一行が伊那にやってきた5年前の明治20(1887)年3月10日。高遠に程近い伊那郡 ^{みすず}美簷村 末広 太田窪で、近くの峠下で行き倒れた乞食(こつじき)の俳人が往生を遂げていた。その名を井上井月という。大鹿村や伊那谷を見下ろしながら、そこを漂泊放浪したのであろう乞食俳人に想いが広がっていったのだった。

ほかいびと・伊那の井月

井上井月の名前を活字で目にしたのは、昨年のことだった。雑誌の記事のタイトルで見かけたのが最初であり、頭のどこかに名前が引っ掛かって残ったようだ。だが深く知ろうとした訳ではなかった。次にその名前が飛び込んで来たのは今年の三月頃かと思う。映画情報をチェックしていたら『ほかいびと・伊那の井月』が目に入った。東京・ポレポレ

東中野で単館上映とのこと。4月上旬に比較的近くに出かける用事もあったので見てみる
こととした。秋葉街道を歩くことでもあり、伊那に所縁の人らしいとの好奇心もあった。

監督は伊那出身の北村皆雄、制作は井上井月顕彰会。主演の**田中^{みん}泯**は舞踏家として著名
だが、映画でも凄みのある演技で知られている。『たそがれ清兵衛』(藤沢周平原作、山
田洋次監督、2002年制作)での反逆の武士の姿が今でも目に焼き付いている。映画を見終
わって、売店で『井上井月と伊那路をあるく 漂泊の俳人ほかいびとの世界』を直ぐに買い求め
た。これから歩く伊那路の四季の美しい映像にも感嘆させられたが、井上井月なる人物を
もっと知りたくなっていたのだ。

井上井月なる人物はいかにもよくわからないことの多い人である。はっきりしているの
は明治20年3月10日に塩原折治方の納屋で、戸籍上は塩原清助として亡くなったことだ。
越後長岡藩の生まれで井上勝造とか克三と称し“柳の家 井月、”と号したが、これはあく
までも自称であり本名とか出自を自ら明かしたことはないという。文政5年(1822)の生ま
れで66歳だったというのも単なる推定でしかない。

いくつかある彼の伝記本・研究書によれば、彼の人物・略歴は次のようである。
彼が伊那谷に姿を現したのは安政5年(1858)頃という。三十歳代半ば、時代は激動の幕末
である。井伊直弼が大老となり開国政策に舵を切り、安政の大獄のあった頃だ。故郷長岡
藩では武士であったか、紋付黒羽二重の小袖、白小倉の袴、菅の深阿弥笠、腰には大小の
刀をはさんでいたと伝わる。親兄弟のことも妻子のことも何も語っていない。若くして仔
細あって出郷し、江戸や京都で儒学や古典を学んだらしい。西行や芭蕉を尊敬し、その足
跡を尋ねて奥の細道や上方を行脚する放浪の生活をおくったとも。これらはいづれも彼が
編んだ句集や残された日記や文章や逸話、俳句などからの憶測であり、未詳でしかない。

伊那にぶらりと来てからは、亡くなるまでの三十数年間上伊那地方を放浪した。家もな
い、家族もない、仕事もない。どうして生きたかといえ、俳諧好きな名主や豪農たちを
尋ね歩き、あちこちで泊めてもらい奇食。冠婚葬祭、村の祭事に顔を出し俳句を読み、書
を残して一宿一飯の恩義にすぎない無宿の俳諧師であった。

幕末から明治にかけての伊那谷は高遠藩と主に天領からなっていたが(分杭峠に「従是北
高遠領」の石標が今でもある)、米の生産に加え養蚕が盛んで豊かであったという。ただ
農民は米は作れど自らはあまり食わず、粟、稗、蕎麦が主食であったという。この地の豪
農、商家では俳諧が好まれ、旅回りの俳諧師や放浪の芸人も訪れたりした。歌舞伎や人形
浄瑠璃の一座も来たりしたのでは。井月のような風来坊の俳句読みにも一夜の宿を与え、
酒食のもてなしをしたとみえる。文明開化前の地方にもそれなりに心豊かな暮らしがあっ
たということかも知れない。

彼の風貌はどうだったのか。幼少の頃老境の井月に接した明治2年生れの**下島勲**は著書
『漂泊俳人 井月全集』(昭和5年)で書き記している。「痩せていて、せい高く、禿げ頭で
髭なし、眉毛薄く、目は切れ長のヤブニラミ、無表情で間が抜けたさながら彫刻のようだ」
「身につけるものといえば、ひとが着せてくれるものをそのまま着たり、肩には小さな
古行李とよごれた風呂敷包みとを両掛にして、瓢箪を腰にぶら下げていた。酒好きで瓢箪

に酒が満たされれば千両々々のご機嫌であった」「何をいうにも、口数少なく、舌がモツれて聞き取りにくく、酒は好きだが、すぐ泥酔して寝小便さえする」「泊まるところが無ければお堂で寝たり、野宿もした」「シラミがたかり、皮癬持ち、手には犬や乱暴者を追ひ払うためにいつも杖を持っていた」「コジキ井月、シラミ井月と嫌われものであった」

井月は伊那谷にとってはキタレモノ(外来者)であり、“ほかいびと、即ち乞食者であった。“ほかいびと、とは、古来“ほかい(寿・祝)、呪言、寿詞を唱えて門付けをして歩く芸人が起源だという。井月の句には、新築の家を寿ぐものとか、子供の誕生や成長を祝うもの、死を弔うものも多くある。

下島勲の父 筆治郎は、井月のことをこうも言っていたという。

「この人は身なりは乞食だがその学殖の高さ、墨書の見事さは正に京のお公家さんだ」と。伊那にやって来る前に修養した彼の教養が身を助け、“ほかい、のための俳句や書が認められるようになり、世話をしてくれる人が多く出来たのだろう。そして短冊・色紙・奉納額・書簡・日記・襖に書いた書などの作品が捨てられずに蔵などに残された。

それにつけても、井月は定住する家は持たず、これといった収入もない人である。よく言えば吟遊詩人だが、寄る辺定めぬ無頼の食客でしかない。故郷から蒸発し、過去を消して生きた今でいえばホームレスのプータローである。さぞかし食うことには難儀したであろうと思う。彼が残した俳句には放浪生活の中での食欲句とも言うべき句作もあった。

そんないくつかの俳句を通して彼の生きざまを見てみたい。

井月の食欲句

放浪・漂泊の乞食俳人といわれるが、食欲を刺激される美味しそうな句も詠んでいる。

初茄子 魚の權威に 争ふか

好きな食べ物は茄子の漬物であったという話が伝わっている。「井月は酒の肴はより好みしなかったが、茄子の漬物は殊に好んだ。正月はこれを初夢漬と称して、しゃぶっていた」と。茄子を詠んだ句は他にもあった。

よき水に 豆腐切り込む 暑さかな

元来中国渡来の精進料理の食材だが、庶民が口にできるようになったのは江戸時代。『豆腐百珍』(天明二年、1782)がベストセラーになり一躍広まったという。祝事の膳にも欠かせないものとなった。切られた豆腐は、味噌汁の具にあるいは田楽にでもなったのか井月は祝事の席に呼ばれ、ご馳走への挨拶句とも言うべき句を詠んだのだ。

鯛料る 人も客なり 初節句

鯛は縁起物、祝い事には昔から定番だった。

数の子や 土器(かわらけ)したしむ 山折敷(やまおしき)

お神酒が盃になみなみと注がれ、子孫繁栄を願った数の子の肴が出たようだ。

新米や 塩打って焼く 魚の味

当時の農民達の常食は雑穀の麦、粟、稗、蕎麦などに大根葉、山菜などを混ぜた雑炊

が主であった。米は普段はあまり食べられなかったが、新米は餅を搗いたり、酒を醸したりし、その恵を寿ぐ句のようだ。ここでは川魚であろう。天龍の鰻が好物だったという。

売りに来る 薄塩ものや 初しぐれ

秋には鯖鱒鰯秋刀魚等が日本近海で獲れ、塩魚として行商が里々にやって来た。寒くなると薄塩になった。井月は能登鰯が好きだったというが、めったに口には出来なかった。

薬喰い 相客のぞく 戸口かな

句意は山鯨の肉が手に入ったと招きを受けた。薬喰いに預かれると、喜んで行ってみたら、他にも招かれた客がいて、そっと戸口を覗くように入っていたことだ。

薬喰いとは、猪とか鹿の肉を冬の夜などに冷え性等に効くとして食すことを言った。古来我が国では、縄文の昔の狩猟時代から戦国時代、江戸時代初期まで獣肉を食べていた。しかし江戸時代17世紀後半以降、仏教の殺生戒から肉食を穢れとして一般的には避けるようになった。だが18世紀半ばからは禁忌もゆるみ幕末近くには獣肉取り扱い店(ももんじや)も増えたという。熊・狼・猿・も食べたが、家畜の馬や牛はなかったようだ。新撰組が西本願寺の屯所で豚を飼って、その肉を食らい鬻鬻をかったという話もある位だ。もともと上流階級ではずっと食習慣があったともいう。公然とは肉食が憚られたので、病気の時に食べる薬、または滋養のための栄養食として食べた。食べる場所も納屋の隅や外でこっそり食べた。猪肉は牡丹とか山鯨、鹿は紅葉とかロクと言うように隠語で呼んだ。

今年歩いた秋葉街道ではあちこちで獣肉(しゃれてジビエと称したりする)を売っていたしその料理が名物になっていた。大鹿村のジビエカレーも美味しかったし、和田郷での牡丹鍋も絶品だった。井月も薬喰いの御相伴に預かることができたのか、その情景が目浮かぶようだ。お肉はやっぱり美味しいご馳走なのだ、今も昔も。

井月は伊那谷で漂泊する以前に、故郷を離れて諸国を放浪・修行の旅に出た。江戸のぼり、西行、芭蕉の跡を慕って「奥の細道」を逆コースで試みたり、須磨、明石辺りまで行脚の旅もしたらしい。旅の各地で詠んだ句もあり、京・大坂・明石といった上方ではいわゆる茶屋遊びの体験もあったという説もあるが定かではない。

その中にはご馳走への挨拶句も目立つ。

籠を透く 笹新しき 松魚かな 一江戸。

鎌倉で獲れた初鯉は超人気だった。

さし鯖は 表使か 女の子 一愛知県。

祝の膳には、塩鯖を背開きにして二尾つつ竹串に刺した「刺鯖」が供せられた。その形が羽根を広げた鳥に似ていたから祝い事一般に用いられたという。なかでも特に健全な父母のいる家庭では、お盆に刺鯖に蓮飯を添えて子供達が父母に供する習慣があったという

雪の日や 三人寄りて 西施乳 一大坂。

この句は、河豚喰いを詠んだものである。ふぐは冬の味覚として庶民に人気があった。今日のような高級魚ではなかったらしいが、その毒はやはり恐れられていたという。

ふぐの一番肥えた「つちすり(砂すり)」の部分が美味とされ、その俗称が「西施乳」と。
『牛馬問』(宝暦六/1756年刊)には「腹中の臍を西施乳といふ これは西施が美にして国を
乱るるを この魚の味ひ美にして毒あるに比すなるべし」とあるという。

底に見る 鉢の模様や 水肴 一京都。

水肴とは鱧(はも)料理のことらしい。

吸物は 潮なりけり 青山椒一明石。

潮汁のことを詠んだ平明な句である。

これらのご馳走句は、かつての修業時代の日々を思い起こしながらの食欲句であろう。
だが、伊那での放浪生活の実情は寄食生活でありご馳走にありつけるのはたまのこと。
時には食べるものもないその日暮しであったのではなからうか。彼には空腹句がある。

露の音 腹も減がに 夜の冴

きっと野宿をした一夜のことであろう。寒くて眠れなかったのか辺りの静寂の中、
露の音さえ空きっ腹にはこたえたという一句。静中に動を感じさせる一句だ。

このように放浪生活での空腹感を詠んだ句としては他にも

粟粥の つなぐ命や 雪の旅

発見された井月の日記に、旧暦明治十六年十二月廿四日 晴 寒風烈。とある。

只居ても 腹は減也 春の雪

ただただ率直に、身体が感じた空腹、寒さを詠んでいる。

彼は芭蕉を尊敬し追い求めたというが、侘びも寂びも軽みもない句とも思えるが。

我が国には、古来定住を拒み、放浪にあこがれる“神の旅、即ち詩魂を求めて漂泊する
という伝統がある。芭蕉が『おくの細道』で「そぞろ神にさそわれ..」と記したように、
井月も神に誘われたひとりであった。だが、一口に漂泊・放浪といっても似ているようで
微妙に違うものがあるようだ。漂泊した詩人達の様を眺め、その違いを考えてみたい。

漂泊の俳人達

井月は越後長岡の生まれとされているが、越後には漂泊の禅僧・詩人・書家として
良寛がいる。良寛が亡くなったのは1831年だが、生前より盛名が知られていた。
井月の生年は推定1822年とされており、幼少年時代から良寛の存在を知っていたかも知
れない。良寛と似たところもあると言われたりするようだ。しかし、二人は多いに違おう
と思える。片や、名家の生まれで故あって出家・得度、そして諸国修行の後故郷に舞い戻っ
て来た僧。学識豊かな人であった。こちらは氏も育ちも故郷を出た事情も一切語らず、そ
して故郷とは縁のない異郷に辿り着いたひとりぼっちの旅の俳諧師。良寛は五合庵など幾
つか定住の基地があり、そこから乞食行脚を繰り返した。歩いたのは主に山崎を中心
にした越後の地であり、そこには彼のことをよく知る縁者がたくさんいた。彼を支えた有力
な豪農・商家・医者も数多くいた。彼ら素封家たちは良寛に米・味噌・野菜・酒・煙草・

薬など87品目もの物資を贈ったという。時には良寛から当時の高級菓子をせがんだりしたことも話として伝わっている。まあそれなりに恵まれた生活であった。

従って、良寛には食欲句は少ないし、まして空腹句もないのだ。

井月には地縁も血縁もなかった。住む家もなく、草庵すら持てなかった。トボトボと村から村へと泊まり歩き、お堂があればそこで雨露を凌ぎ、時には野宿をする生活を続けた。食生活だって文字通りの行乞であった。たまに馳走の酒食に与れば「千両、千両、」と言って喜び、挨拶句を達筆で書き残した。俳句や書が無ければ、とうに野垂れ死した男だ。良寛は宗教家としても一流であり、悟達の境地を示す漢詩や俳句、書を残している。井月はどうか。宗教家でもなんでもないただの俳諧師といっでは言いすぎだろうか。だが漂泊・放浪のレベルとしてははるかに井月の方が凄い。ギリギリで生きたと言える。

井月が尊敬した芭蕉は漂泊者としてはどうだったろうか。次に考えて見たい。

芭蕉には、確かに旅を重ね漂泊に生きた人というイメージがある。禅僧として出家・得度もした。「自得箴」という句文の中で「貰うて喰ひ乞ふて喰ひやをら 飢ゑも死なず」と書いたり、江戸中期の『総ふかゝは集』(梅人編)に芭蕉の言として「行脚の掟」が紹介されているという。「魚鳥獣の肉を好んで食ふべからず 美食珍味に耽るる人は他事にふれやすき物なり 菜根を咬みて百事をなすべきの語を思ふべし」と。但しこれは後世の偽作との説もある。如何にも清貧に生き、寡欲の人のようにみえる。

かの『おくの細道』にも、食欲句は金沢の地で詠んだ次の一句しか入っていない。

秋涼し 手毎にむけや 瓜茄子

だが、芭蕉には芭蕉庵をはじめ近江の幻住庵など定住の住まいがあった。そこを根拠地として何度か旅に出ている。ほとんどは門人達を訪ねて各地で句会を開いたり、そこで新たな門人を獲得する為の旅であったりした。あるいは新たな句の境地を開くための旅であったりした。つまり営業用の旅であったと思いたい。決して喰い詰めての行乞の旅などではないのだ。漂泊の中に身を置き、そこから生まれるインスピレーションを求めている放浪だったのではなかろうか？

芭蕉は若かりし頃は料理人との説もある位だ。食欲句、馳走句も数多くある。例えば、

梅若菜 まりこの宿の とろろ汁

両の手に 桃とさくらや 草の餅

鎌倉を 生て出でけむ 初松魚

しかし空腹句は芭蕉にはないのだ。

井月は、芭蕉たらんとして修行の旅に出て風雅の道を求めた。俳諧求道のレベルでは遙かに及ぶことはなかったものの、行乞のレベルは師を超えたといえるのかも。

江戸時代の漂泊・放浪の俳人としては、芭蕉の不肖の弟子に露通(1649～1738)がいる。

乞食僧として行脚の途中芭蕉と出会い入門した。奔放にして驕慢な言動が門人達から不評・反感を買い、後には勘当の門人とも言われた位である。

奥の細道の同行を当初予定されていたが、何故か曾良と交代させられた男でもある。

彼の代表的な句にこういうのがある。

いねいねとひとにいわれつ 年の暮れ

“いね、は去れという意味である。あちこちで門口に立ち恵みを乞うても、冷たくあしらわれた己の姿を、自嘲気味に詠んでいる。

同門の人達からさえその性格・行動を嫌われたという、乞食坊主 露通 のふてぶてしいばかりの開き直りの人生が感じられるではないか。井月も同じような場面がきっとあったであろう。だが、こんな凶太い句は詠んではない。

井月は乞食の放浪の俳人ではあったが、この露通のように開き直ったところはない。淡々と、トボトボ、ヒョロヒョロ、グツグツと行き倒れるまでただ歩き廻った。

こんな二人のことを、こう言った俳人がいた。**山頭火**だ。

「私は芭蕉や一茶のことはあまり考えない、いつも考えるのは露通や井月のことである」

行乞・漂泊の俳人として名高い種田山頭火は、58歳で亡くなる前年の昭和14年の9月16日に日記に書いていた。二人の放浪・漂泊の境涯に感心と共感があったのであろう。彼は井月が亡くなる5年前の明治15(1882)年山口県生まれだ。大地主の家に生まれながら、母や弟の自殺、家の破産等を経験した複雑な過去を持つ。32歳で荻原井泉水門下の自由律俳句詠みとなったが、44歳の時出家得度。托鉢行乞生活を主に、各地の句友を尋ね歩いたり、草庵生活をしながら暮した。大きな網代笠に杖、墨染の衣に度の強そうな黒縁眼鏡、山羊髭を蓄えた彼の写真はよく見かける。

妻子を捨て、家を捨て、旅にさすらう漂泊の俳人のイメージが定着している。

代表的な句はいくつかあるが、敢えて挙げれば、

うしろすがたのしぐれてゆくか

分け入っても分け入っても青い山

名優、渥美清は放哉や山頭火の映画を演りたかったが、寅さんのイメージが強すぎて断念したという話もあるようだ。実は山頭火役がはまっていたかもしれない。

山頭火の実像が、清貧のイメージとは違って、脱俗の人ではなく煩惱の人であったこともまたよく知られたことだ。無銭飲食はするは、酔っ払って電車を停めるは、酒癖の悪さは天下一品だった。布団で粗相をすとか、そのだらしなさでも知られていた。彼の故郷では「あねえな乞食坊主、防府の恥じゃね」と、足を入れさせて貰えなかつたことがあるとか。友人達や子供からの金銭や酒食の援助は平気で受けたし、無心をすることも巧みだった。俳句の才能がなければ、人格も破綻したただの生活無能力者。文字どうりの乞食だろう。山頭火はこのことをよく自覚していて、日記(1939・9/2)にこう書いている。

一無能無才、小心にして放縦、怠惰にして正直、あらゆる矛盾を蔵している私は、恥ずかしいけれど、こうなるより外なかつたのであろう。

一意志の弱さ、酒の強さ、一ああこれが私の致命傷だ！

山頭火の食欲句

こんな山頭火が、もっとも悩まされた煩惱が食欲だったかも知れない。

山頭火は「私はその日その日の生活にも困っている、食ふや食わずで昨日今日を送り迎えてゐる」(1939・9/2)と書き、「私がいつも食卓に対して嘆くことは一私の胃袋が大きい、大きすぎることである」(1939・8/17)と書いている。自分の胃袋が大きすぎるのが悩みであり、食欲をもてあましていた大飯食らいの行乞僧だった。

山頭火の俳句には食べ物句がとても多い。日記にも酒や食生活のことを頻繁に書いた。

まずは、こんな句はどうであろうか。

春めいた風で牛肉豚肉馬肉鳥肉

下関の市場で、通りかかった肉屋の店頭で胃袋を刺激された一句か。

なんとなくまそうなものばかりがショウキンドウ

行乞の身では、食べられそうもないものばかり。空きっ腹にはつらそうだ。

朝焼け夕焼け食べるものがない

春はうつろな胃袋を持ち歩く

てふてふひらひらおなかがすいた

何にも食べるものがなく絶食した時もあった。

食べるものがなければないで涼しい水

こんなにうまい水があふれてゐる

山頭火には水もごちそうであり、空腹を癒してくれたのだ。

風のなか米もらひに行く

ホイトウと呼ばれる村のしぐれかな

「飲み食いしないでも句を作ることは怠らない、いひかえると、腹はへっても句は出来るのである」「生きるとは句作することである、句作即生活だ」と山頭火は句を詠み続けた。行乞しながら句作をしたのである。

もらうて食べるおいしい有りがたさ

そしておいしいものをいただく時は、素直にそれを句に詠んだ。

飯のうまさが青い青い空

ふるさとはちしゃもみがうまいふるさとにいる

うどん供へて、母よ、わたしもいただきます

山頭火には実に胃袋句が多い。胃袋の大きさが違うようだ。

まるで修行のようにじっと堪えていた井月とは、次元の違う空腹句だ。

山頭火が井月に出逢ったのは、俳友の国森樹明から『漂泊俳人 井月全集』(下島勲、高津才次郎編)を借りて読んだ時だった。昭和7(1932)年8月2日の日記に、「よい本だった、今

までに読んでいなければならない本だった、井月の墓は好きだ、書はほんとうにうまい」とある。そして、山頭火は伊那の井月の墓参を宿願とすることになったのだった。

伊那へ来た山頭火

井月への墓参を最初に企てたのは、一年半後昭和9(1934)年、53歳の春が最初だった。三月、山口県小郡の「其中庵」を立ち、広島・京都・名古屋の俳友達をゴチになりながら巡り訪ねた。四月、名古屋から木曾路を経て、大平峠を越えて伊那の飯田に4/15着いた。この時、疲れと寒さで病をえて飯田で二週間も入院。井月の墓参を断念し山口へ帰った。と、年譜等にはあるが、木曾から飯田へ抜ける峠越えのコースについては異説がある。

『山頭火虚像伝』(木下信三、1990年刊)は、山頭火に纏わる様々なデフォルメを詳細な検証で浮かび上がらせた好著だ。その中に、この峠越えの足跡を歩いて調べ検証した章がある。それによれば、大山澄太とか上田都史といった人の説が見事に論破されている。大平峠を越えたとか、清内路村で野宿したとかいう憶説は誤りであると。事實は、清内路村で泊まり残雪の鳩打峠(標高1173m)を越え、大瀬木、切石を経て飯田という道であったと。

根拠は当時の峠越え道の道路事情、山頭火が出した手紙、関係者が残した記録、さらに現地での聞き込み、自分の足による踏査だ。豊橋から飯田まで鉄道が通るようになったのは昭和11(1936)年11月のこと。昭和9年、山頭火が歩いた頃は、木曾と飯田を結ぶ最短経路は鳩打峠越えだった。人も通れば馬も通る、行商人や行者や坊さんたちもよく歩いたという。それにしても今だに、大平峠を越えて飯田に出たという、説明が諸処の文献に残っているのはどうしたことだろう。

初めての伊那は、残雪の峠越えで雨風に難儀して、肺炎に罹って入院するという散々な目に遭った山頭火だった。それにもめげることなく井月墓参に再び旅立ったのは、昭和14(1939)年の春のことだ。略年譜には、「三月、行乞開始。近畿、東海、木曾を歩く。伊那で井月の墓参をする。五月、風来居帰着。」とある。風来居とは、前年に移住した山口県湯田温泉の草庵のこと。前回の伊那入りからの五年の間には、睡眠薬自殺未遂とか、紹介された就職先を五日でやめたとか、泥酔して無銭飲食して五日間留置されたりとか、自句の短冊を売り歩いたりとか、相変わらず人騒がせな人生をおくってきたようだ。

この時、初めて井月の名を知ってから、はや七年近い歳月が経っていた。

4月17日には、名古屋を経て、刈谷から知多半島の河和に山頭火は現れた。自由律俳句『屠雲』の同人、**帰城子宅**(旅館・堀田屋)で一泊。翌日には内海の同人**橋本健三宅**でも一泊。そこからは師崎から渥美半島へ渡り、豊橋、浜松では数日俳友の家で世話になった。

4月24日に友人宛に出した手紙には、「天龍を溯って伊那へ向かひます、伊良湖崎と鳳来寺と八忘れられません、...おたより八前田若水君方へ。」とある。しっかりと気分は物見遊山のような、これを行乞の旅と云うのか。宿を提供し酒食をもてなし、時には金銭の面倒までみた仲間達が沢山いたことに驚かされる。俳句結社とは何と有難いところだろう。

前田若水は、伊那在住の『層雲』俳人。彼に厄介になり、彼の案内で井月の墓参をすることを当てこんでいたこともわかる。

4月29日 浜松を立って電車で二俣のM屋に泊り、ゆっくり休養。

4月30日 光明山参拝、山越えはせず秋葉山麓のN屋泊。

5月1日

古風な参道を登り秋葉神社へ。裏道を信州街道へ好々爺と道づれに、平山から瀬尻、渡船で西ノ渡へ。泊りはI屋とある。

友には「秋葉山の上下りに八弱りました、眺望八彦山に似て、それよりもすばらしい、天龍川はさすがによいですが、明日八は信州入、若水居へ向かひます、伊那地方で八しばらく滞在するかも知れませんが、そのうちまた。」と手紙を出し。

日記には「水を飲むこと 歩くこと これが私の健康法だ、そして一好きな物を、好きなだけ—これが私の行き方だ。... 煩悩を煩悩するなかれ、こだわるなかれ、とどまるなかれ、疑ふなかれ、いねるなかれ、...そして、流れるままに、流れるところまで流れてゆけ。(夜半、感ずるところありて、記しておく。)」とあった。

5月2日

水窪川(天龍川の支流)にそうて水窪町へ。そこで青崩峠方面は難路と聞き、途中雷雨の中、天龍川本流の方に峠を越えて白神駅へ。そして電車に乗り、宿のある満島(今の平岡駅)へ。T屋に落ち着いたのは山峡もとつぷり暮れた七時半。日記には「途中は苦しかったけれど、風景は申し分なかった、殊に峠を下りつゝ、天龍を見はるかす山のすがたは何ともいへなかった、絶景絶叫だった。」とあるが、どの峠を越えたのかは不明だ。

白神駅は今は無い。昭和11年12月に三信鉄道の停車場として開業。飯田線が飯田から豊橋まで全線開通したのは昭和12年8月である。山頭火が秋葉山から飯田方面に歩いた頃はまだ出来たばかり。だが、昭和30年佐久間ダムの工事で事情は一変した。白神駅他三駅は廃止、飯田線も付け替えが行なわれ、翌31年のダム完成により湖底に沈んだのだ。西渡は当時鉦山景気で活気があった町という。今秋、私たちは塩の道街道歩きの旅で、信州和田郷から青崩峠を水窪町へと越え、水窪川沿いに西渡、そして裏参道を秋葉山へ参詣する。山頭火も歩いた秋葉街道を、逆にはなるが辿ってみることとなる。果たして、どんな山峡の絶景絶叫が待っているのだろうか...

5月3日

飯田線に乗って天龍峡から一時には伊那町着。前田若水を訪ね、その日の内に、同道して井月の墓に参詣した。友人宛の書信で、「伊那では井月の墓にまゐりました、宿願の一つを果すことができました、...」と報告した。この日の日記には、若水の家を捜して荷物を預けておいて、「女学校に若水君を訪ねる、初対面だが初対面らしくもなく。」とある。如何にも山頭火らしい。図々しい。相手のことをいちいち思いやることはないようだ。

山頭火が秋葉街道を歩いた昭和14年といえば、支那事変(昭和12年7月)からズクズクと続き、戦時色が強くなってきた時代であった。

山頭火にも時代を伺わせるこんな句があった。

おぢいさんも戦闘帽でハイキング

飯田線で見かけた光景なのか、どこへ歩きに出かけたのだろうか。

ところで、『山頭火虚像伝』にはこんな興味深い話もあった。

まずは、この旅での山頭火の姿については「トレードマークの法衣に杖笠ではなく、帽子に下駄、僧形とは違って、地味な黒っぽい着流しの和服姿」であったと考証している。

井月墓参の時に詠んだ句 **お墓したしくお酒をそゝぐ** の解説についても、後世の脚色を暴いている。『定本山頭火全集』第五巻(春陽堂・昭和48年刊)の「解説」他の文で、**大山澄太**が書いた井月墓参の情景は、氏による創作の文章であろう、と考証している。

この句は山頭火の心象風景を詠んだ願望の句であり、虚構の句であることを、同行した若水の手記から証明し、墓参時には酒はなかったのが事実であると。大山澄太は山頭火の若き弟子のような人であり、その名を後世に伝え高めた人である。漱石における小宮豊隆のような存在と言えは言い過ぎか。とかく本尊を奉り、**鼻^{ひいき}扇**を引き倒すことがあるので注意したい。大山澄太は、山頭火も若水も亡くなってしまった三十年以上経ってから、あたかも見てきたかのように墓参の様を描写した文を発表した。一自然石の墓に抱きつき、二合入りの小ビン酒をぶっかけて井月にはわしが飲まずと話しかけ、坊さんらしくしばらくお経をよんだと一ところが実際には、供える酒もなく、酒を垂らしてあげたかったと、ぼやきを繰り返していた、というのが事実らしい。自然石の墓とあるが、実際には塩原家が井月の三十三回忌に立てた句碑だ。ともかく山頭火は宿願を果たせたのだった。

伊那で三泊した山頭火は、歩いて権兵衛峠を木曾へ越え、木曾路を名古屋に向かった。

あくる年の昭和15年10月11日、松山市御幸寺境内の「一草庵」で^{かね}予ての予言、願望通り脳溢血でコロリと往生した。煩惱のままに、歩き、詠み、生きた生涯ではなかったか。

らーめん と 蕎麦

井月は明治20(1887)年に亡くなったのだが、永らくその名が知られることはなかった。彼の作品は伊那の各地で埋もれていた。それを世に出したのは、前述の下島勲(1869～1947)であった。今の駒ヶ根市の出身で軍医を経て東京・田端で医院を開業。近くに芥川家があり、芥川龍之介の主治医でもあった。「井月の句集」を大正10(1921)年に自費出版した。名主や村長を務めた父の下島筆治郎から聞かされ、自ら井月を覚えてもいた。伊那の各地から弟の下島五山の協力も得て、作品を拾い集めたのだ。この句集の跋文は芥川龍之介が書いてくれた。芥川は井月を認め、その書を「入神とするをも妨げない」と評した彼は、短編小説『庭』や「雑筆」の中でも一信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり。拓落たる道情、良寛に劣らず。一と紹介している。芥川は昭和2(1927)年に残念ながら自殺。生きていれば井月のことをもっと世に出してくれたかも知れない。

下島勲は、伊那高等女学校の教師 **高津才次郎**(1885～1969)などの協力を得て、井月の作品、書簡、日記、説話などを収録し昭和5(1930)年『漂泊俳人 井月全集』に纏め、出版した。山頭火が読んだのはこの本であった。山頭火は井月を慕ったが、彼の書簡や日記の中だけのことであり、それ世に広めた訳でもないし、時代もそれどころではなかったのは言うまでもない。その名が次に登場するのは、戦後、評論家・石川淳の『諸国崎人伝』(昭和32年刊)の一章だった。かなり辛口な評伝と云えるが、勿論広く世に知られる処とはならなかった。

「井月の句集」の巻頭には芥川の尽力で**高浜虚子**(1874～1959)が句を寄せてくれた。しかしながら俳句界の大御所虚子は、その後井月のことを何故か取り上げることはなかった。『井上井月研究』(中井三好)は、虚子は井月から発想・素材・構成をまねた疑いがあると、推察している。つまりパクったと。その性かどうか、井月の句が『俳諧大辞典』にのったのは昭和32(1957)年、『図説俳諧大歳時記』にのったのは昭和40(1965)年まで待つことになる。何故か、塩原井月としてだ。井上井月はまだ世に現れてこない。

山頭火の名が広く世に知られ始めたのは、昭和46(1971)年頃のラジオの深夜番組からだという。**永六輔**が彼の句を取り上げたことが反響を呼んだのだ。このころから、山頭火はメジャーになっていく。同じ自由律俳句の同人・**尾崎放哉**と共に漂泊・放浪の詩人として人気を集めた。週刊少年マガジンに『ヒッピー俳人山頭火』(旭丘光志)という漫画も掲載されたという。私が山頭火の名前を知ったのは丸谷オーの『横しぐれ』からだと思う。調べてみたらこの本は、昭和50(1975)年に単行本になっていた。その頃だとの記憶がある。山頭火に関する本、研究書も多く出され一種のブームになっていたようだ。

放哉、山頭火のブームにつられて、この頃井月も便乗して喧伝^{けんてん}されそうになったともあったが、その証拠は見出せなかった。井月は伊那の地元の俳人や研究家達の間で、知る人ぞ知る人物であったに過ぎなかったようだ。『漂鳥のうたー井上井月』(瓜生卓造)の初版が出たのが、昭和57(1982)年。この本が井月評伝本の始まりなのだろうか。

私が山頭火の名前を刻み込まれたのは、「**らーめん山頭火**」の存在と云えそうだ。あの豚骨味の白いスープから、山頭火も縁のある熊本ラーメンかと思い込んでいた。旭川が創業の地であり、昭和63(1988)年3月10日オープンらしい。店名の由来は、資料によれば、山頭火にあやかることを思いつき、開店の日も4月予定だったのを3・10にしたという。

「らーめん山頭火」は国内30、海外16(5/未現在)も店舗展開する有名ブランド店だ。それだけでない、日清食品・セブンイレブンと共同開発したインスタント麺もある。2001年に発売以来、現在でも「らーめん山頭火ー旭川とんこつ塩味」として、全国14196のセブンイレブンの店舗(5/未現在)でしっかりと定番商品の座を確保しているのだ。山頭火の知名度は衰えることはなさそうだ。でかい胃袋の乞食坊主山頭火にラーメンはいかにもピッタリだ。

井月には、ラーメンではなくやっぱり蕎麦が似合う。駒ヶ根市には「**井月そば**」があるようだ。飯田線駒ヶ根駅前にある、割烹食堂「水車」のメニューに「井月丼」と並んで提

供されているとのこと。井月の句に因^{ちな}んで、イノシシ肉を使った名物として2008年から登場させたい。ソースかつ井につぐ伊那の名物にまでは、まだなっていない。

旅と放浪、酒を愛した句人として山頭火は、全国的によく知られている。それに対し、井月の知られ方は信州・伊那に限定的だ。伊那ではよく知られた「井月さん」ではあるが、まだまだ全国的な存在にはなっていない。2011年になって先の映画が公開されたり、井月研究の書が出版されたりし、漸く注目され始めたところではない。二人の知られ方の背景には、生きざまの違いがあるようだ。丁度ラーメンと蕎麦とでは、こってり強烈な個性の味とさっぱりした滋味な個性の味という違いがあるように。どちらにも味わい深いものがあり、それぞれに良さがある。さてどちらにしようか。

終わりに、井月さんの味が出ている句を紹介してみたい。

何処やらに田鶴^{たづ}の声聞く霞かな

この時代、伊那谷にはまだ鶴が生きていた。鶴は井月のことか。

降るとまで人には見せて花曇り

高遠での花見が丁度こんな天気だった。

有りし世の憂さをも語れ鉢叩き

放浪しながら空也念仏を唱えて歩く僧へ語りかける井月であった。 (了)

【参考資料】

- 『日本アルプス 一登山と探検』(1995年平凡社刊)
- 『漂泊俳人 井月全集』(下島勲、高津才次郎・1930年)
- 『諸国崎人伝』(石川淳・1957年)
- 『信濃路の俳人たち』(藤岡筑屯・1975年)
- 『漂鳥のうたー井上井月』(瓜生卓造・1982年、2011年に『どこやらに、井上井月』と改題出版)
- 『井月伝説』(江宮隆之・2001年)
- 『井月研究』(中井三好・2011年)
- 『月刊俳句界』(2011年8月号「酒と旅を愛した明治の放浪俳人・井上井月」)
- 『井上井月と伊那路をあるく 漂泊の俳人ほかいびとの世界』(北村皆雄、竹入弘元編・2011年)
- 『定本 山頭火全集』(春陽堂・1973年)
- 『漂泊三人 一茶・放哉・山頭火』(金子兜太・1974年)
- 『横しぐれ』(丸谷才一・1975年) 『文人悪食』(嵐山光三郎・2000年)
- 『山頭火 虚像伝』(木下信三・1990年)
- 『山頭火 徹底追跡』(志村有弘編・2010年)
- 『江戸の庶民が拓いた食文化』(渡辺信一郎・1996年)
- 『図説江戸時代食生活事典』(日本風俗史学会編・1996年)
- 『江戸の俳諧にみる魚食文化』(磯直道・2006年)
- 『蕉門名家句選』(堀切実 編注・1989年)
- 『良寛の逸話』(谷川敏朗1998年)
- 『郷土史事典・長野県』(1979年)
- 『芭蕉博物誌』(上田都史・1983年) 他

